

ナキウサギに押し寄せる波

かわみち・たけお
1944年生まれ。北海道大学理学部生物学科卒業。同大学大学院をへて、現在大阪市立大学理学部生物学教室助教授「理学博士。著書に「原嶺の森」(中央公論社)、「けものウォッチング」(京都新聞社)、「ウサギがはねてきた道」(紀伊國屋書店)など。

川 道 武 男

エゾナキウサギは氷河期が終わってから北海道の山地で人目に触れずに生息してきた。彼らのひそやかな生活に、最近ひたひたと脅威の波が押し寄せてきた。それは、自然破壊の恐れがあるとして中止になっていた大雪山国立公園内の然別湖での道路工事計画の再燃であり、もう一つは大規模林道計画である。今なぜ開発なのか、それらの工事はどれだけ必然性があるのか、という疑問は自然を愛する者でなくとも当然わきあがってくる感情である。その感情を抑えて、エゾナキウサギとはどんな動物なのか、基本的な生態をまず理解する必要がある。

手のひらいっぱいになる可愛い小さなウサギであるエゾナキウサギは、平地には生息できない。そこで「神秘的な動物」のイメージがついてまわる。霧の深い岩場で、鼻を少し天に向けて岩の上でじっとしている姿を見ると、なるほどと納得できる(図1)。



図1. エゾナキウサギ

ナキウサギの仲間

ウサギといえば、長い耳と長い足というイメージがまず浮かぶ。その典型的なウサギといえば、北海道の山野にふつうに見られるエゾユキウサギである。ふつうに見られるといっても、実際に姿を見た人は大変少ない。しかし、雪の上に残された特徴的な足跡なら見た人は多い。前に並んでいる大きい足跡が後足で、後方に縦についているのが前足である。これはウサギ目独特の跳躍法で、足の短いナキウサギさえこの跳躍法で移動する。

ウサギ目は体重が数キログラムあるウサギ科と、体重が三〇キログラム以下のナキウサギ科にわけられる。ウサギ科は十属約四十五種いるが、ナキウサギ科にはナキウサギ属の一属しか含まれていない。ナキウサギ属は北半球だけに分布し、約一九種いる。すべての種は寒冷気候の高山かステップか、高緯度地方の低地に生息している。つまり、ナキウサギ属は暖かい気候のもとでは生活できない仲間である。

ナキウサギ属の十九種は基本的に似たような形態をしているが、生態は種ごとにさまざま違いが見られる。生活場所では、岩塊地の岩の隙間に生活する種、ステップの草原に穴を掘ってネズミのような生活をする種、砂漠の荒れ果てた岩だらけの地に穴を掘る種、森林の倒木や川岸の流木の隙間にも生活する種などがある。ナキウサギの名前のとおり、大きな鳴き声をあげる種が多いが、ほとんど鳴かない種もある。冬季の食物として大量の植物を貯蔵する種もあれば、ほとんど貯蔵しない種もある。

ナキウサギ属の社会組織もさまざまである。一頭一頭が単独でなわばりをもつ種もあれば、ペア

で暮らす種もある。食料が豊富にある草原に生活する種では家族なわばりをもつ種もいる。一つの属に多様な生態をもつ種が含まれる理由は、ナキウサギ属が寒冷気候にあるさまざまな環境へ進出した結果の小さな適応放散なのであろう。なぜこのような多様性が進化してきたかは、比較生態学の対象としてとても面白いテーマである。

なぜ島に分布するのか

ナキウサギ属のうちで最も分布域の広い種はキタナキウサギである。このナキウサギはシベリア全域、モンゴル北部、中国東北地方、北朝鮮と中国国境にある白頭山まで南下している。ナキウサギ属では唯一に島にも分布する種でもあり、サハリンと北海道を分布域に含めている。

なぜキタナキウサギだけが島に分布するかは、氷河期との深い関係がある。氷期には、大陸に大量の水が氷として蓄積されるために、海面が低下して、島が大陸と結ばれて陸橋が出現した。シベリアとサハリンの間の間宮海峡は現在の水深が二十メートル、サハリンと北海道との間の宗谷海峡は水深六十メートルである。ナキウサギのような小型の哺乳類は陸続きでなければ北海道にまで来れなかったであろう。氷期が終わった後は氷が溶けて海面が上昇し、再び北海道が孤立して島になった。ナキウサギは暖かい気候を避けて山に登った。それが現在のエゾナキウサギである。

キタナキウサギの一亜種であるエゾナキウサギは、北海道の中央部に分布が限られていて、大雪・十勝山系、日高山脈、夕張山塊の山岳地帯と、北見山地と呼ばれる手塩岳から置戸地方にかけての比較的高度の低い山地に生息する(図2)。

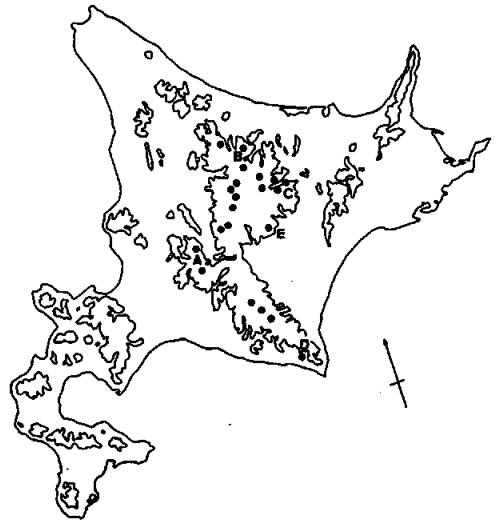


図2. エゾナキウサギの分布地点(●)と海拔五〇〇メートルの等高線。A:夕張山塊、大規模林地計画地域、B:滝雄-厚和線、C:置戸-阿寒線、D:平取-えりも線、E:十腕高原道路(四つの道路計画地点は小野山敬一氏の御教示による)。

寒冷気候を好む彼らは、ふつう海拔四〇〇メートルから生息し、二二三〇メートルの白雲岳の頂上近くでも姿が見られる。例外的にアポイ岳に近い場所では海拔五十メートルの例があるが、アポイ岳の高山植物と同じように、霧がよく発生して夏の気温があまり昇らないために、低い標高まで降りているのであろう。

エゾナキウサギの生活

岩のころころした岩塊地を訪れると、チヨロチヨロと岩の隙間を走りまわる姿をみるか、特徴的な

鳴き声が聞こえるので、エゾナキウサギの存在がわかる。岩の下をのぞきこむと、こしょうの粒に似た糞が山積みになっているのもすぐに確認できる。そうやって岩場で動きまわっていて、ふと頭を上げると、岩の上にちよこんとエゾナキウサギが乗っている。褐色の体で、頭胴長が十三センチ、二〇センチ以下の体重である。丸い耳は一・五センチの長さで、尾はほとんど見えない。

エゾナキウサギはひんぱんに鳴き声をあげる。外形からみると雌雄の区別はつかないが、オスは「キッ、キッ、キッ・・・」と規則正しく鳴く連続音が特徴であり、メスは「ピュー」と長い声をあげる。彼らは基本的に朝夕に最も活発であるが、夜間もいくらか活動する。活動時間帯には鳴き声も活発である。

岩のあちこちで出入りするので、岩場のどこでも均一に使うように見えるが、観察を続けると大岩や特定の場所に集中して姿を現すことがわかる。これが活動拠点であり、直径数メートルである。ナキウサギはある活動拠点で食べたり、鳴いたり、日光浴したりしては、別の活動拠点へ移動する。その移動には、岩の上を跳ねるよりは、地下を通過していくことが多い。

活動拠点の岩の下をのぞきこむと、乾燥野菜のような植物が多量に貯蔵されている。ナキウサギが冬季の食物用に草花や木の枝を切り取って運んできたものだ。ウサギの仲間であるから、貯蔵物は植物質だけである。八月から貯蔵を開始し、九月には貯蔵行動が最も熱心である。

秋から冬の間は、一頭のオスと一頭のメスのペアで、共通のペアなわばりを防衛する。隣りの定住者の侵入だけでなく、定着を試みる若い個体を

追い払う。この場合、同性の侵入者だけを追い払うが、異性の侵入者は追い払わない同性間なわけである。

一つのペアなわけには、十一二十五の活動拠点が含まれていて、複数の食物貯蔵所がある。ペアが共同で貯蔵した貯蔵食物は、冬の間の主要な食物になる。こう書くと、ペアは仲良く連れだちをするように思えるが、メスとオスは同じなわけりの中でバラバラに行動する。避けあいながら動きまわっているように見える。

エゾナキウサギは海拔四〇〇以上の地域にある岩塊地にしか生息できない。このような岩塊地は、ふつう一つ一つが孤立していて、連続してはいない。大規模の岩塊地や岩塊地が数カ所まとまって存在する地域は、ナキウサギにとって最良の生息地であるが、このような場所は山岳地の山頂部に限られる。このように生息環境が限られているうえに、岩塊地は直径六十一七十歳のペアなわけりで細かく分割されている。そのため、北海道に生息できるエゾナキウサギの総個体数には限界がある。分散していく若い個体が幸運にも定着できる岩塊地を見つけた確率はかなり低いと考えられる。

押し寄せる波

エゾナキウサギの分布地点(図2)を見ると、分布のかたまりとして、日高山脈、大雪・十勝山系、大雪山系の北東部に広がる北見山地、それに夕張山塊がある。このうち、夕張山塊の個体群はきわめて少数で維持されている。

夕張山塊の個体群は大雪山系の個体群からは約二十キ離れていて完全に孤立していること、さらに夕張岳と芦別岳は約十五キ離れているが、分布

が連続していないと推定される。氷期が終わって以来、夕張山塊と北海道中部の分布域とはお互いに遺伝的交流がない状態と考えられる。夕張山塊の個体群が消滅しないように、生息環境が改変されないように監視する必要がある。

大きな分布域と大きな個体群を持つ日高山脈、大雪山系、北見山地の個体群も、それぞれにエゾナキウサギが安泰して暮らせないような事態になってきた。

十勝地方の然別湖一帯は、比較的低い生息地としては最大のものと考えられ、一般の人がナキウサギを観察できる場所としても貴重である。自然破壊の恐れがあると中止されていた道路工事が再開される計画が進んでいることは、新聞記事でよく知られているとおりである。大雪山国立公園は、氷期に大陸とつながっていたことを証明する、日本ではこの国立公園にしか見られない貴重な動植物が多く、これら水河遺棄種の宝庫である。

さらに、大規模林道の計画が浮上してきた。全国で展開されている大規模林道計画は、北海道では三カ所が計画されている(図2)。いずれもエゾナキウサギの生息地を通過し、生息地を破壊する恐れがある。滝雄―厚和線と置戸―阿寒線は北見山地の個体群、平取―えりも線は日高山脈個体群を分断する道路計画である。

この三計画のうちルートがはっきりしている置戸―阿寒線は、私が四年にわたって調査してきた調査地のすぐ脇を通過する予定である。厳しい大雪山では長期間の調査ができないために、置戸で野外観察をしたのだが、置戸町はエゾナキウサギが発見された地でもある。

置戸は木材の町であったが、すでに切られるべ

き木は切られてしまい、明るい植林地になってしまっている。その名残りが「町宮はんば」である。今さら林業のための道路を開通させる必然性はまったくない。また、住民の生活道路としての機能も考えられない人口希薄な地域である。なぜそのようなところに二車線の舗装道路が必要なのだろうか、理解に苦しむ。また、観光道路としても脚光を浴びると思えない。北海道によくあるが、通過する車が滅多にこない、きれいな舗装道路になるだけのようなのである。

なぜこのような道路が計画されるのか、なぜ林道の名目で計画が押し通されていくのか、結局は我々の税金が使われることに国民も追求していかなければならない。ナキウサギがきわめて排気ガスに弱い動物であるという認識、日本列島がはぐくんできた自然、北海道の財産が失われるという認識が、地図上で道路計画の線びきをする役人にも浸透して欲しいものである。

参考文献

- 川道武男 一九七二 ナキウサギの社会と進化の探検 自然一、二月号 中央公論社
- 川道武男 一九九一 ナキウサギ属の進化と比較社会学 (朝日・川道編)「現代の哺乳類学」朝倉書店
- 川道武男 一九九四 ウサギがはねてきた道紀伊国屋書店 二七〇頁
- 小野山敬一ほか 一九九一 野生動物分布など実態調査報告書 道保健環境部自然保護課 一五九頁
- 小野山敬一 一九九六 エゾナキウサギ保護の現状と問題点 北方林業二月号